

シンポジウム企画趣旨 (2004年度公開シンポジウム報告「トラウマ概念の再吟味 - 埋葬と亡霊 - 」)

著者	森 茂起
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	6
ページ	5-8
発行年	2005-02-17
URL	http://doi.org/10.14990/00002530

シンポジウム企画趣旨

コーディネーター 森 茂起

『トラウマ概念の再吟味——埋葬と亡霊』と題するシンポジウムは、五年前に開催したシンポジウム『トラウマの記憶と表象』の成果を受け継いで、さらに発展させようとするものである。

五年前のシンポジウムは、トラウマという主題をめぐって臨床畑の専門家と人文畑の専門家が討論することを目指して行なわれた。トラウマは、近年の臨床心理学、精神医学の研究、実践においてもっともホットな話題の一つになっているとともに、思想、芸術の分野においても本質的な問題を提議している。前者の傾向は、阪神淡路大震災後の臨床活動から児童虐待対策まで、そしてそれらの中でしばしば言及されるPTSDという診断名などを通してよく知られている。後者は、「ホロコースト」をめぐる議論を代表として、戦争を題材とする文学、芸術、思想書は膨大な数にのぼる。創造活動を刺激するトラウマはそうした巨大な事象に限らない。暴力、別離、事故など、個人的なさまざまなトラウマを消化する中で生まれたのが、多くの文学作品であろう。しかも、トラウマの描出を作品の主目的とする作品の数は現在ますます増加

しているように見える。しかしそれぞれトラウマを主題にしていながら、一方の臨床領域と、他方の思想、表現領域がともに議論を戦わせる機会が極めて少ない。五年前のシンポジウムで、精神医学、臨床心理学、哲学、映画学の専門家にそれぞれの立場からトラウマについて語っていただいたのは、そうした機会を提供するためであった。

考えてみれば、かつて現存在分析、実存分析といった心理療法が生まれたころ、哲学と精神医学には活発に議論を交わす場があった。精神医学の主流であったか否かはともかくとして、精神を扱う臨床の世界には哲学への志向が確かに存在した。それは心理療

法が人間の精神の一つの極限を扱うことから来る必然的な傾向であったろう。臨床心理学においても、深層心理学はも

ちろん、ロジャーズも晩年にいたるほど哲学に近づき、いわゆる人間性心理学を生む契機となった。しかし近年、精神医



学の生物化学傾向や臨床心理学の制度化などによって臨床分野と哲学の交流はきわめて乏しくなっている。心理療法が扱う精神病と無意識という心の極限領域が、かつて哲学との共通領域を形成したのであるが、現在の心理療法の関心はその当時とかなり様相を異にしている。臨床心理学についていえば、かつての極限領域への関心から、より日常的世界での制度的対応への関心——それは社会的需要から必要なことではあるが——に移行していることが交流を乏しくさせているのであろう。

本研究では、精神の総合的研究を要請する極限状況としてかつて病と無意識が占めた位置をトラウマが占めることになる。五年前のシンポジウムでは各領域の関心を並列することで、共通の関心領域がそこに存在することを照らし出すことを目的とした。タイトルを「トラウマの記憶と表象」としたのは、それがトラウマの重要な側面であるとともに、各領域からアプローチしやすいと考えたからである（後に行なった出版では集まった論考の内容から『トラウマの表象と主体』（新曜社）とした）。

ここまでが前回までの紹介である。二〇〇四年七月に開催した今回のシンポジウムでは、同じトラウマをテーマにしなから、トラウマが一つの極限状況であることをいっそう明確に示そうとした。副題の「埋葬と亡霊」は、トラウマが一度埋葬されながら繰り返しよみがえろうとすること、あるいは常に埋葬され続けているながら現在の人間の在り方を密かに決定していることを示そうとする言葉である。「トラウマ＝傷」

の比喩だけでは捉えられない人間の精神全体に関わる極限状況でありながら、「病」としても「無意識」としても概念化できない現象をこの言葉によって少しはとらえられるのではなにかと考えたのである。

実際、臨床世界において今現在もつとも実践家を悩ませているのは、病でも無意識でもないように思える。精神病は薬物療法の発達とともにずいぶん軽症化し、十分扱うことのできる対象となり、むしろ社会がどのように病者を受け入れていくかの方が重要な課題となっている。無意識はむしろ常識化し、誰もががあると信じる当たり前の対象となってしまった。今の臨床現場に急速に増加し、臨床家を悩ませている現象は、トラウマの事象がもたらす後遺症であり、その一つの形としての「解離」である。「埋葬と亡霊」はこの解離のイメージとして適切である。

「埋葬と亡霊」はまた、個人内部の現象ではなく、社会的現象をもとらえる比喩である。人間の心、精神から社会、国家まで、マイクロからマクロまで、さまざまなレベルにおける現象を照らし出す視点としてである。社会を成立させるためには、何者かを埋葬し、亡き者にしておかねばならない。そうすることで、社会は一定の統合性を獲得し、安定を保つ。しかし、埋葬されたものは決して消え去ることなく、時を経て再び目に見える形で私たちを訪れる。それはトラウマの一つの本質的特質であり、トラウマはそのように働くという言い方ができると共に、そのように働くものをトラウマと呼ぶと言うこともできる。

今回シンポジウムで講演をお願いしたのは、加藤寛氏、白川美也子氏、高橋哲哉氏であり、私もその一人として参加した。加藤寛氏は、現在「兵庫県こころのケアセンター」の研究主任をしておられる、阪神淡路大震災後のトラウマ・ケア、こころのケアを牽引してこられた精神科医である。先生には、大震災後の経験をもとに、災害によるトラウマを中心に、大惨事が私たち個人および社会に与えるトラウマ的作用について話していただいた。そもそも私たちが取り組んでいるトラウマという主題がこの神戸の地で特別な意味を持ったのは、言うまでもなく阪神淡路大震災の衝撃があったからであり、その衝撃の後遺症は今も続いている。神戸の町からその跡が消滅するにつれ記憶が埋葬されながら、常に私たちの生活の背後でそれが働いているという意味で、まさにトラウマ的な出来事である。

甲南大学人間科学研究所は、地域に開かれた研究組織として、「兵庫県こころのケアセンター」とも密接な連携を保つていこうと考えている。「こころのケアセンター」は、震災によるトラウマはもちろん、数々の惨事トラウマから児童虐待の被害まで、さまざまなトラウマへのケアのあり方を研究するとともに、社会におけるトラウマ的現象を幅広く研究主題として取り上げようとしている。本シンポジウムが、その研究の一助にもなることを願っている。

白川美也子先生は、国立療養所天竜病院で、主として児童期、思春期の子どものトラウマ治療の最前線で活躍されている精神科医である。白川氏の関心は臨床的な「解離」の取り

扱いにあるが、より広い社会的文脈におけるトラウマの存在についても深い関心を抱いておられる。今回のシンポジウムでは、その臨床実践の紹介とともに、個人史におけるトラウマの働きについて話していただき、さらには世代を超えたトラウマの亡霊的作用についても触れていただくとした。

三人目の高橋哲哉氏は、哲学の立場からトラウマの亡霊について扱っていただくためにお呼びした。氏は、「靖国の母」「靖国の妻」の問題を取り上げ、靖国神社がどのようにして個人の感情を扱い、国家の論理のなかに組み込む機能を果たしてきたかを論じられた。高橋氏は、戦後責任の問題、慰安婦問題といった極めて政治的なアクチュアルな問題に「正義」を論じる哲学の立場から取り組んでこられた方である。またホロコーストの証言を映像に留めた『シヨア』の日本での上映運動に携った方でもある。言わば一貫して記憶の問題、私の関心から言えば、記憶に刻み込まれたトラウマの問題を扱っておられる。今回の、靖国神社問題もその一例であり、シンポジウムの一つの重要な論点を持ち込んでいただいた。その結果は、本紀要に収録した討論によく現れている。

最後に私自身が「攻撃者への同一化」という概念を紹介した。私は臨床心理学を専門とする人間であるが、近年、子ども虐待問題に関わることが多く、その中で暴力の連鎖という事態にしばしば遭遇する。その連鎖は短い時間単位から世代を跨ぐ長さまでいたる。臨床場面で出会うこうした現象からその基本的メカニズムを抽出したのが「攻撃者への同一化」概念である。過去に存在してすでに埋葬されたはずの攻

撃行為が、時間を経て亡霊のようによみがえってくるという現象は、個人の暴力から集団の暴力まで幅広い領域に存在するように見える。本シンポジウムのテーマを照らし出す一つの視点として紹介してみた。

指定討論者には、近年トラウマの記憶に関する重要な論考を発表されているとともに、昨年度まで甲南大学に奉職され、今年から「兵庫県こころのケアセンター」所長を務めておられる中井久夫先生と、私とともに甲南大学人間科学研究所の運営者であり、高橋氏と問題領域を共有しながら「正義」の問題を追及してこられた港道隆氏に指定討論をお願いした。精神医学、哲学という異なった分野から暴力の亡霊の理解に迫るのに最適のお二人である。

以上のような構成で計画された今回のシンポジウムは、議論の盛んなトラウマ論に、日本ではまだまれな学際的検討を加えるよい機会となったと思う。そして議論はその流れの押し進めるところに従って、靖国問題、戦争のトラウマの問題に向かっていた。フロアにおられた研究員の一人の言葉を引用させていただくなら、「靖国問題をめぐり、政治的立場に基づく対立からはなれて、その本質に向けて議論を深める稀有な機会」になったのではないだろうか。